



# ECO活動で地域に 広がる融和の輪

プロジェクト用の遊休農地は、川端町から南橋公民館西隣に一昨年移転。3月中旬から1カ月ほどが見ごろです



栗原秀夫さん(65歳・上小出町)



芝田保彦さん(75歳・田口町)

遊休農地に咲く、ほんわかイエローの菜の花。食べておいしく、実った小さな種からは食用油を搾り出し、廃油はバイオの力で自動車燃料に。時代のキーワードの一つエコ活動を通じて、地域の融和の輪を広げている「南橋地区地域づくり推進協議会」。今回は「菜の花(田口菜)プロジェクト」の実践で、昨年11月にまえばし水と緑の環境賞の大賞に輝いた同地域取材しました。

担当は市民編集委員 吉田、杉崎。

問い合わせは 南橋公民館 ☎231-2376



とになりました。栽培から調理法に至るまでの技術指導に尽力している芝田さんは、「田口町ほたるを守る会」初代会長などを歴任しました。「赤城白川の河川敷にも種をまきました。花の時期は、あつと驚くほどの美しさですよ」と優しいまなざしで語ります。

プロジェクト用の遊休農地は、道路整備関連で移転。栽培面積は27㍎に半減しましたが、その種子は風に運ばれて、各地に根付き始めています。また、散歩道として広く愛されている桜並木沿いなど、さまざまな場所に植えたいという声も上がっています。



おいしい調理法を伝授。水にさらさないことがポイントです



小さな種だから、繊細に、慎重に種をまきます

**菜**の花プロジェクトは、琵琶湖の汚染対策の一つとして滋賀県でスタート。県内でもさまざまな自治体などが取り組んでいます。今回受賞した南橋地区は、明治のころより同地に息づく菜の花の一種「田口菜」が主役であることが特徴。明治天皇に献上したところ「すこぶる美味なり」との言葉をもらい町名を取り田口菜と命名したというエピソードを持つ、地域の伝統野菜です。

プロジェクトの契機となったのは、市の地域づくり推進モデル地区「第1期生」に指定されたことです。自然環境部会・ごみ減量リサイクル部



田口菜を使い作りました

田口町にある橋山に、自然環境部会が中心となり3種130本のヤマザクラが植えられたのは3年前。その足下にも昨秋、種がまかれ、寒風の中、今、青々と葉を茂らせています。数年前までは荒れ果てていた里山。2カ月後



公民館で搾油体験も実施。独特の香ばしい油が取れます



3月を迎えると、本格的な摘み菜の開始

会など5つの部会が組織された中、「花・緑いっぱい部会」は、菜の花プロジェクトを活動の柱の一つに。同部会長の栗原秀夫さんは、「地域のつながりの希薄化が危惧される時代ですが、活動を通じ、改めて『地域の融和・温かさ』を痛感させられました」と熱く語りました。

プロジェクトの実践会員は、毎年、一般公募しています。「さまざまな団体から強制的に人を集めるのは可能だけれど、それでは、意義が薄れてしまう。不特定多数の人が、自主的に集まれる仕組みづくりが重要です」と、栗原さんは強調します。

**編集 後記** 冷たい雨のそぼ降る取材日。わたしたちを迎えてくれたのは、関係者の笑顔と温かいお茶、田口菜を用いた巻き寿司、貝だくさんの炊き込みご飯でした。(写真上) 芝田さんの妻・紀枝さんが、わざわざ調理してくださったのです。今回は希少な菜種油のびん詰めもいっしょに写真撮影。巻き寿司は2本あったのですが、おもしろい風情と香りに誘われ、撮影前に思わず1本ばかり。人々を温かく迎える心遣いに、「南橋の心」を見、味わわせていただきました。深く感謝を申し上げます。

には満開の菜の花で彩られ、後を追うようにヤマザクラが咲き始めます。

地域で守りはぐくまれてきた「宝物」の一端に触れることができた今回の取材。それぞれの地域の実情や歴史を踏まえた地域の掘り起こしや活性化、コミュニティ形成などさまざまな実践のヒントの数々を、教えていただきました。

**栗**原さんが何よりも大きな喜びを感じるのには、子どもたちが一連の作業に楽しみながら取り組んでいる姿を目の当たりにするときだそうです。活動は10月の種まきから始まります。砂粒みたいに小さな種なので慎重にまき、12月ごろ必要に応じて除草作業を実施。3月になると本格的な摘み菜を行い調理します。軽くゆでた後は、ざるに上げて冷まします。おいしさが逃げてしましますので、水にさらさないことがポイントです。3月中旬を過ぎたところから1カ月ほどが花の見ごろです。5月下旬には種取りを行います。

本年度の会員は、子どもから高齢者まで約90人ですが、家族などによる飛び入り参加も多く、活動の輪は確実に広がっています。

**田**口菜のルーツは、花・緑いっぱい部会副部会長の芝田保彦さんの祖父が、明治時代に草むらから発見したアブラナの固有種です。癖のない味が特徴で、地区の特産品に。昭和30年代までは市場に出ましたが、その後は自家用栽培のみの状況でした。そこに浮上したのが同プロジェクト。これにより再び脚光を浴びること